

北社会ニュースオ74号

2011年7月21日

発行者： 鈴木壮夫

7月18日早朝、なでしこジャパンが世界ナンバーワンに駆けあがった。その時、私は店でそばを打っていた。自宅でTV観戦中の妻から逐一メールが届き、延長で追いつき、これからPK戦と。3-1で優勝と知るまでの数分間、実に長い時間だった。ラジオも声だかに勝利を祝った。久しぶりに嬉しい瞬間だった。「小さな娘たち」のハングリーな精神。そばを打ちながら目頭が熱くなった。そして、私が社会人となった1964年の東京オリンピックでの女子バレーの金メダルを思い出した。諸外国から「東洋の魔女」と驚きの目で見られ、もはや戦後ではないと多くの国民が実感していたと思う。朝日新聞の夕刊に“ロストジェネレーションなんて誰のこと。やるじゃないか若者。”やったぞ!!

(1) 7月25日-第291回北社会-

講師： 佐藤浩視氏 (高25回) ~仙台在住のプロカメラマン~

広告写真・(株)プロ・バンク 代表者

テーマ： 「鎮魂の譜」

3月12日、あの悪夢のような津波が襲った翌日から撮影をはじめた。

初めのころは無我夢中でシャッターを切った。三陸の町々を訪れる度に足が重くなり、被災者に話しかける言葉を失った。圧倒的な津波の力を前に無力な人間の営み、あそこでも、ここでもと眼下に繰り返される非常なまでの津波の爪痕。私は津波の被災地には親戚が多く、子供の頃から何回も訪れており、かつての風景の記憶があるだけに、目に入る光景が信じられないのだ。

明るいうちは自衛隊、消防隊の捜索が続くが、夕刻から夜は、生者のいない沈黙が支配する空間になる。今まで体験したことのない静寂とは全く異なる音の無い世界、数千の命と多くの建物が一瞬にして失われた平地に残るコンクリートの塊は、巨大な墓碑のようだ。

この信じがたい光景を留めておかなければと、ただ鎮魂の祈りを込めて写し続けた。

佐藤浩視氏と今回のご講演について数回FAX, その他で交信をさせていただき私の未知の分野で活躍されておられること、ご自身の上記「鎮魂の譜」で述べられておられるような素晴らしい哲学で仕事を続けておられることがよく分かりました。

被災地の撮影を続け、東京六本木・中国北京・ニューヨーク・東京銀座等々で展示会を開催する一方ウェブサイト(FlickR, LE LETTRE)及び週刊現代、週刊金曜日にも掲載されたとのこと。

今月中旬以降も週刊現代の緊急依頼で南三陸町歌津の取材、又写真甲子園へ東北震災枠で選ばれた石巻女子高を応援したいと思いセミナーを実施、19日からはフィナンシャルタイムズ、TIMEの仕事です。そして肝心の仕事の広告写真はさっぱりで、お金にならない報道関係の業務が忙しい。でも、被災地の状況を息長く世界に発信していくことが大事だと思いますので、頑張っておられるそうです。(清々しいですね!!)

(2) 7月14日、被災地、石巻市訪問 ～がんばる強い気持ちをいただきました～

私の母は明治43年生まれ、西暦では1910年です。今年の4月、7年前からお世話になっている川越市内のグループホームの101才の誕生会では皆さんと次から次へと好きな歌を唄い続けました。その母が70才台に一人で住んでいたのが仙台市青葉区旭ヶ丘でした。その家は10年前から動物病院を営んでいる六人家族に借りていただいております。地震の直後、家族は全員、大丈夫と電話連絡をもらいましたが、以降何の要求もなく、私もさぼってお見舞いに行くことをせず、やっと7月13日、そば屋を閉めてから仙台に向かいました。空き室がなく、やっと4軒目で泊まる場所が決まり、久しぶりに国分町へ。賑わっておりました。若い女性が午前様でも多数堂々としているのにはびっくりしました。ホテルのベットに横になってまもなく“なでしこ”がスエーデンに勝ちました。久しぶりの森林公園そして旭ヶ丘のボロ家。本当に良い人達に借りていただいていると感謝の連続でした。仙台駅に戻っても10時頃。先月の北社会にて和賀井先生が被災地現場を訪問せよ！と言われていたのを思い出しバスで石巻に向かいました。渋滞もありましたが12時前には石巻駅前に到着しました。突然、事前連絡もせず11回の同期生、遠藤君に電話したところ、すぐ迎えに行くとの回答。嬉しくなって駅前でピョンピョンと飛びはねていました。約3時間も被災地を案内してもらいました。先ず、遠藤君の寄稿葉書をどうぞ。

この度の東日本大震災に際しましては、11会の皆様からの安否の問い合わせとお見舞い激励を戴き、厚く御礼を申し上げます。

自宅は地震による被害のみで、家族も全員無事でしたので御休心下さい。しかしながら海岸から500mしか離れていない本社と関連会社は5mの津波の直撃を受け完膚無きまで破壊されました。社員38名と、関連会社員27名全員の無事を確認できましたのが、地震から四日後で、その間は眠れぬ夜が続きました。専門家の地質学者ですら想定出来なかったこの大災害は、人智では何等抗うすべも出来ず、地域住民はもとより地方の経済基盤に深い傷跡を残してしまいました。しかしながら地元における復興への熱意は高く、東北人特有のねばり強い忍耐力を以って再起を期しております。いまだにライフラインの整備の見通しは立っておりませんが、社員とともに瓦礫と戦い、老骨に鞭打ち、会社再建に努力中です。11会の出席を躊躇っておりましたが、漸く落ち着きましたので皆様から「カツ」をいただきに参加することにしました。

2011.5.9 石巻市 遠藤祐也

11回生の同期情報紙ピンピン第11号への寄稿文です。食品製造会社が使用する副原料（調味料、サプリメント原料等）を取り扱い年商55億円。被災ユーザーは宮城・岩手の沿岸部に多く、15億円を越す売上減、早くも3年で復興してもらいたいと希望しているが、水産業界のダメージは甚大。後継者がいない、資金調達の困難、等々。客先の自己破産、民事再生申請により不良債権の発生も懸念される。大震災による損害は4～5億円と覚悟している。業歴は62年になり、それなりの実績も積み重ねてきた。自己資本で復興を推進中。行政支援を当てにせず、自力で立直る決意を固めている。年初では今年、社長を退く積りだったが、72才の老骨に鞭打って日夜奮闘している。頭が下がりました。私は二高時代の熱き思いが心にわきあがってきたのに感謝して川越に戻りました。何の援助もできない、でも何かをしたい、何かをせねば、訪問には意味がありました。